

建設時評

時を繋ぐ

東北大学大学院 情報科学研究科
准教授 平野勝也

近代においては、モダニズムの名の下に、世界中の多くの大都市郊外には、ニュータウンや郊外団地が造成されてきた。しかし、ニュータウンは小綺麗かもしれないが、単調で無機質で人間的な温かみに欠け、魅力ある街にはなりにくい。一気に造り上げたニュータウンは、その一時期の様相しかない薄っぺらな街にどうしてもなってしまうからだ。大規模な都市再開発事業も同じである。大規模であればあるほど、小綺麗で格好いいかもしれないが、厚みのない街が出来上がるのだ。

これは、1960年代以来、都市デザインに突きつけられた積年の課題である。今まで、この課題を払拭するような、様々な都市デザインが模索されてきた。例えば幕張のベイタウンパティオスでは、マスターアーキテクト方式を取り入れ、統一感によって生まれる魅力を残しつつ、その中に、それぞれの建物の個性を際立たせることで、単調で無機質な街にならないような工夫がされている。しかし、一時期の様相しかないことについては、未だにどうすればいいか明快な答えはないといっ

て良いだろう。ただ、逆から言えば、少なくとも、「魅力ある都市は、かならずその歴史とともにある。」ということは言えるのではないだろうか。

モダンな都市デザインの先駆者として著名な横浜市が、明治期の遺産をととても大切にするのは、明治以前の歴史がほとんどないからだという話を聞いたことがある。渋谷は、震災復興区画整理の計画が縮小されたために、百軒店、円山町、スペイン坂等が手つかずで残った。そのことが、渋谷に歴史的な多様性を残し、渋谷の魅力を下支えしている。折り重なる歴史が、その街の魅力を高めることに疑問の余地はない。全国で熱心に取り組まれているまちづくりにおいても、街角のお地蔵さんや、昭和初期からある街角のお店といった、街の小さな歴史を拾い集め、それを大切に未来へ繋いでいくことが、当たり前のこととして行われている。

* * *

2011年3月11日。日本中の人の心の中に、深い悲しみと、人の強さや美しさへの感涙とを折り重ねながら、早、半月が過ぎた。この号が世に出る頃には、ある程度復旧に目処が立ち、多くの読者諸兄が、被災地の復興に向けて、尽力、奔走してくれていることだろう。

街の復興にあたっては、失ってしまったものが、あまりに大きすぎたから、災害に強いまちづくりといったスローガンが、前面に出てくるであろう。土木学会による調査団の調査項目も、その点を意識したものになっている。もちろん、それはとても大切なことだ。しかし、忘れてはならない。失ったものは、尊い人命や財産だけではない。幾多の人生とともに、おびただしい数の街が、集落が、積み重ねてきた場所の記憶を一瞬にして失ってしまったのだ。

失ったものは取り返せない。一時期に出来た街として、薄っぺらになってしまうのも仕方がないと、諦めるのは早計である。古来、日本人は、山懐に抱かれて暮らしてきた。そうした暮らしの中で、いわば、自然に甘えて街をつくってきた。だから、凱旋門といった人工構造物をシンボルとしてきた西欧とは一線を画し、盛岡の岩手山や北上川を出すまでもなく、日本の街のシンボルは自然物が極めて多い。江戸の名所を紹介する江戸名所百景でも、寺院といった建築物ではなく、富士山や筑波山をはじめとする自然物が美しく見える場所が選ばれている。京都市が、比叡山をはじめとする周囲の山への眺望景観を大切にすることも、同じ理由である。

また、山や川といった、大きな自然だけではない。先人達は、街の排水や水害の防御、水田への配水などのために、土地の持つ微妙な高低差にも、腐心して街や集落を形作ってきた。「境」の語源が、「坂」に通じているのは、こうした微地形と日本人との深い関わりと無縁ではない。坂道は地形の変わり目にあるのだから、異なる空間への境でもあったのだ。そして、江戸時代の街道筋は、決まって排水のために微高地を通っている。街にある道の多くには、意味と歴史が、詰まっているのだ。

たしかに被災地では、ほとんどの建物を失った。しかし、周囲の美しき山は残った。海は意味を深めて、相変わらずそこに佇んでいる。日本人として、一番大切にしてきた自然までもを失ったわけではない。そして、多くの道が、街角が、建物という大切な伴侶を失い寂しそうに、残っているのだ。「港に向かう緩やかな下り坂」、それは、災害前の、いつものありきたりで、日常的な風景だったかもしれない。しかし、たったそれだけのこ

とに見えるかもしれないが、そこには、多くの人の、日常的な歴史や記憶が詰まっているのだ。その道筋だけは、今もちゃんと残っている。

* * *

現代は、まちづくりの時代である。こうして僅かに残った、しかし、とても大切な歴史を最大限活かしながら、新しい街の魅力を創っていく。今こそ、今まで誰も経験したことのない、丁寧なまちづくりが、求められている。全国で展開されているまちづくりの叡智を、被災地に集めよう。街は、災害に強くなければならない。しかし、災害に強いだけの要塞のような街であってはならないのだ。そして、街は、一時期に出来上がった薄っぺらな街であってもならない。深い悲しみとともに断絶された街の過去と未来とを、なんとか繋ぎ止めることができるのは、今しかない。今、その努力を怠れば、未来永劫、その街の歴史は途切れたまま、繋がることはない。そのことを忘れた復興では、真の意味の復興にはならない。

筆者は、そんなことを銘記して、復興に取り組んでいきたいと思っている。